

徳川時代刊行節用集の展觀に就て

龜 田 次 郎

本篇は昨秋本學圖書館に於ける展觀徳川時代刊行節用集について當時開催の全國高等諸學校圖書館協議會にての龜田教授の講演筆記である。夫を同會誌第十二號より抄出し、今茲に同教授の御諒承を得、轉載して本誌第十六卷第四號所載の展觀書目録と相互對照參考の便に供す（編輯者記）

私は今回本學に於て秋季展覽會を開催するに付て、私の持つて居ります節用集を差出せと云ふことで、私は差出ししましたらそれで事が済むのだかと思つて居つたが、數日前の新聞に只今お話になりました新村博士と私とが講演することになつて居た。私は書籍だけ差出したらそれで役目が済むのだかと思つて居ると、講演までやれ、而かも其講演も學校の方に對してははなく、皆さんのお寄りになつて居る會議でやれと云ふことで、甚だ意外千萬であつたが、併し辭退する譯にもいかぬから、二十分位で御免を蒙むことに致します。甚だ詰らぬ語でございますけれども、暫くの間お聞きを願ひます。

節用集は足利の末頃に初めて世に現はれて、明治維新後西洋の字引が入つて來ますまで、通俗辭書として一般に用ひられたやうであります。此名前に付ては、或は支那かぶれをして、論語の學而篇に、道千乘之國、敬事而信、節用而

愛人使民以時」とある文句から出たと云ふ説がありますが、これは同じ通俗辭書で而も同時代に出来た下學集の書名が論語の憲問篇の文句から採つたと其序文に見えてゐるのでそれに眞似た説である、節用集を拵へた人は、節用集と云ふのは必要な季節に使ふ書籍と云ふ意味で名付けたのである。これが穩當なやうに思はれます。是は今申した通りに足利時代に出来たものでありますが、最初誰が作つたか分らんが、只今お話になつた新村博士のお話なり、他の人々のお書きになつてゐる所に依りますと、五山潞りの僧侶が拵へたものだと言ふお話であります。誰が拵へたと云ふ證據がないのです。

所が現今、遺つて居ります古い節用集を調べて見ますと、大略三つの系統があるやうに思はれます。第一が普通には伊勢本と申しまして、節用集の一番最初のイの部に天地門或は乾坤門と本に依つては書いてありますが、其最初の語彙が伊勢に始まつて居るのを申します。其次ぎには此最初の語彙が、印度に始まつて居るのを印度本と云つて居ります。第三には此最初の語彙が、乾に始まつて居るのを乾本と云つて居ります。詰り節用集の種類系統には伊勢本と印度本と乾本と三種類あるのです。其の中でそれが一番古いかと申しますと、先づ時代から云つても伊勢本らしい。次ぎが印度本らしい。其次ぎが乾本らしい。それはどうして出来たかと云ふと先づ日本は御承如の通り神國であります。神國だからして、伊勢の大廟があるので、伊勢を一番初めに持つて來た。其次ぎに伊賀を持つて來た。是が前ならば伊賀、伊勢といかんければならないのですが、大廟があるから伊勢、伊賀、と云ふ具合に持つて來た。是が一番最初に出来た。それから其次ぎに出来た印度本はどうして出来たかと云ふと、日本の國々六十六ヶ國を節用集の尻に持つて行つたから、日本の國々の名をすつかり取除けたからして其次ぎにある語彙の印度が最初に出て來たので

ある。今日世に遺つてゐる一番古い伊勢本は、明應五年五月三日の奥付のあるものです。これは皆さんも圖書館で始終お使ひになつてゐる群書一覽の第二卷目の節用集の所に書いてあります。それから日本の國名を節用集の尻の方に廻はして初めて出來た印度本は、どれが一番古いかと云ふと、今日残つて居るのでは、原本かどうか分らぬが、殆ど原本に近いもので弘治二年の寫本があるのです。只今申した通り伊勢本が最初に出來て、次に印度本が出來た。所がどうも日本國の字引として印度を一番初めに持つて來るのは、神國として不似合である。日本國一般にやるには、印度を初めに持つて來ては日本國の字引として體裁が悪いやうな氣がしたか知らんが、今度は印度と云ふ所に關係ある佛の出生したとか、或は鎌倉の五山とか、京都の五山とか云ふやうな佛事に關係したことを書物の最後の所へ持つて來た。さうした所が印度は取れたが、然らば何を持つて來たらよいかと、云ふと節用集の初めは、いろは部門別になつてゐて、而も部分けの最初が乾坤門、天地門であるから最初の語彙に乾を持つて來た。それで乾本が出來たのです。つまり三種の系統は最初日本は神國であるから伊勢を持つて來た。次ぎには印度を持つて來たが體裁悪いからと云ふので、乾坤門だから乾を持つて來たので出來た譯であります。

最初に出來ました所の伊勢本には、天正十八年に、泉州堺で刊行されてあります。是は私の知つて居る範圍では、元東京の帝大にあつたのと、今東洋文庫にあるのと、二つ残つて居つたが不幸にも東京大學のものは大正の震災の時に焼けて了つた。今日では東洋文庫本だけしかありません。次ぎには美濃紙型半切の横綴の饅頭屋本といふ刊行本があります。この二種が伊勢本での刊行であります。所が印度本の方はどうかと云ふと、どう云ふ譯か知らんが、寫本ではあります。板本ではありません。刊行されなかつた様であります。所が三番目の乾本は、慶長二年に易林本と云ふ

のが初めて楷書に書いたものが出来た。それが後に或は行書本或は眞草二行本或は楷書本の改刻など種々の本が刊行されてありますが、徳川時代になつてから慶長二年に初めて出版された乾本の系統のものがずつと續いて居ります。徳川時代の節用集は殆んど其全部が此乾本の系統であります。又此時代になつてから段々木屋が、書籍を賣り廣めると云ふやうな商略的の關係上、或は其書籍に頭書きを附加へたり、或は増補したりして居ります。又給人本もあります。所が頭書増補本や繪本は何時頃から出来たかと云ふと、頭書増補は大體寛文年間から出来た。繪入本は元祿四五年からのものは皆それです、それから後になると大きな三世相のやうな本が今日でいふ通俗百科辭典とでもいふ様なものが出来て居ります。又段々後になりますと、新奇を銜ふやうになりまして、節用集はいろは字引、漢字は玉篇が流行つてゐたから、此二つを合併して、上欄は玉篇、下欄は節用集と云ふやうな事になつて本を開けて見れば上が玉篇、下の方が節用集になつて居るやうな、今日で云ふと和漢合併の字引も拵へて居る。之れの出来たのは先づ日録に載せてあります四十四の元祿六年頃に出来たものが最初で後になつて百十四、百二十二の寛政八年や文化三年にも出来てゐます。此等が玉篇と節用集と合併したものです。所がそれだけでなしに、今度は丁半の偶數、奇數即ち、言葉の數で、例へば稻ならいの偶數の所で引くとか、又禱と云へば、三字の奇數のいの所を見ると云ふやうな事になつて居る。是はずつと後の文化元年刊行の偶奇假名引節用集一名長半引節用集で日録の百二十のものです。尙後になると分類體ではいかぬ、即ちいろは字引で天地門とか、人倫門だけでは便利が悪いと云ふので、今度は假名の數でわけた、いの時なら以、亥と云ふ字をいの一の所で集録し又命、禱と云ふのはいの三の所で引くと云ふやうに假名の數で引く所の字引が出来たのであります。是は後世よく流行つたもので、日録で云ふと八十七です。早引節用集と云

ふ寶曆七年正月再板のものが最初ですから少し之以前に出来た様であります。大變流行つて來て、是が一番勢力を得るのです。所が此節用集も後年種々新奇を銜ふやうになつて、分類體と假名數とを併用したものも出来たが、それは本屋が全く世間の需用に依つたのであります。今日吾々が何の爲めに此等の節用集を使ふかと云ふと、吾々専門から申しますと、日本語の種々の材料として即ち國語史の研究資料として之を引くのです。現に先刻お話になりました新村博士の如きは、節用集をよく御利用になつて、種々新説を出されてゐます。博士は此節用集から南蠻のお話に關係ある言葉を抜かれたり、國語史上の材料をよく抜かれて居ります。今日一般に使はれてゐる南蠻語の日本語化したもので一例を申しますと、シャボン、今の石鹼のシャボンと云ふ言葉は、字引で何が一番古いかと思ふと私が調べた所では、林羅山の拵へた慶長年間の多識篇の中には、シャボン、と云ふ言葉が石鹼と書いてあつて、是は南蠻から來たものだと思ふことを書いてある。それからガラスのことを、私の幼少の時分には能くビイドロと聞きましたが此ビイドロと云ふ語は何時頃から節用集に載つて居るかと思ふと、延寶八年頃に出来た節用集、此目錄で申しますと三十一、三十三の字引には節子と書いてビイドロと傍調がつけてあります。是が南蠻語のビイドロの入つた節用集の一番古いものだと思ひます。それから後の節用集には硝子と書いてビイドロと入つて居ります上に又フラスコなどゝ書いてあります。此日本の節用集と云ふものは、西洋盛行つて翻譯出版もされて居るのです。それは日本の文化史の上に於て大貢獻大功績のあつたシーボルトの翻譯して出版したものに此節用集があります。それは四十八の元禄十一年に出来て享保以後屢々重板致しました増補和漢合類大節用集一名和漢音釋書言字考といふのであります。何故シーボルトが之を翻譯して出版したかと云ふと、節用集として學術的に申しますと、イロ／＼引用文を記して居つ

たり或は和漢の書籍から注釋して居り、一番完備した學術的のものでありますから、シーボルトは之を日本の字引の代表として翻譯して居るのです。もう一つは百十の大全早引節用集、天明八年初刻で、近く明治初年迄に十三刻されてゐて是は字引としては言葉の數は、之れ迄出た字引の中で一番多いのです。之をシーボルトが翻譯して、勿論通俗字引として翻譯して居りまして、原稿も出來て居るが、是は出版にならずに残つて居る。現に其原稿が東大の市河博士や大英博物館や日本學會などに所藏されてゐます。又この他舊幕時代に海外に漂流した人が安南まで流されて行つて、彼土の大官に節用集を一冊やつた所が大官連は大に驚嘆したとか、又歸りには支那に行つて、支那の大官に他の一冊をやつたと云ふことが、寛政九年に出來た枝芳軒著南洲記といふ本の第四卷目に載つて居ります。此の贈與したと云ふ節用集は、どれかと云ふと、目錄八十二の寶曆二年刊行の和漢節用無雙卷と八十八の同じ寶曆七年出版の大大節用集萬字海とであります。又節用集は舊幕時代に和蘭との交通の爲めに、此和蘭の影響もあります。現に文化十二年に出來た蘭例節用集と云ふものがあります。これは語彙の第二字迄いろは順にして集め本文に迄挿圖が這入つて居る。本文に挿圖の這入つたのは之が最初のもので頗る珍異なものであります。尙殊に甚しいのは目錄の最後の百六十五の魁本大字類苑と云ふもので、是は慶應二年に出來て明治二十二年四月刊行して居る。是は洋綴です。之を見ますと越前武生の漢學者で谷口松軒と云ふ人が、節用集を和蘭語のハルマ和解といふ名高い辭書に依つて作つたと云ふことがあります。斯う云ふやうにして節用集と云ふ通俗字引も、海外の影響に依つて編纂される様になつて明治御一新まで及んだ。明治維新後になつてからも、私共の幼少な時代に、私共の祖父や祖母が節用集を机の上や硯箱の側に置いて日常使つて居りました。所が是も明治二十年頃までは澤山有つて、さうして隨分新版も出來て居る。併し二十年

代になつて山田美妙齋さんの日本大辭典や大槻博士の言海や高橋五郎さんのいろは辭典などの立派な辭典が出来て、西洋流の字引に依つた便利なものが出来た爲めに、段々其影を潜めて今日では殆どないのです。併し大正年間迄はいろは字引があつて現に坊間に青い表紙、赤い表紙で時々出て居る。それは大正時代までどうして残つたかと云ふと、維新頃に寺小屋へ通つて居つた人達は、字引として幼少の時に節用集を引いて居つたから、其使つて居つた習慣や情性が抜けないので、其等の人達が六十、七十になつても元の節用集が便利だからと云ふので、矢張り明治時代には影を潜めたやうだけれども、矢張り引續いて大正七八年頃までいろは字引は出版になつて居ります。

それから斯の如く節用集は、今日では全然影を潜めて居るけれども、字引としては今日では最近大言海を初め種々の完備した澤山の字引が出来て居りますけれども、吾々の如き日本文學なり、日本の語學なりを研究する者には此節用集と云ふものは國語の材料を拾ふ上には決して見逃がすことの出来ぬもので、或は國語の古い言葉拾ひ、或は國語の發音假名遣、國語の語尾活用の変遷はどうなつて居るかと云ふ所謂國語史の研究資料として必要上使ふのであります。それから此節用集はどこで出版になつたかと云ふと大部分は三都江戸と大阪と京都で刊行されて居ります。稀には京都附近の伏見や名古屋や其他の地方で出版になつて居るのがありますけれども、徳川時代に於ける節用集と云ふものは大體出版は三都に限つて居ります。併しタツタ一つ懷ろに入れるやうなもので、早引節用集だけはどうしたものが明和七年に信州の松本で出来て居るのがあります。それだけが除外例であつて、大概三都で出版されて居ります。其の外節用集の中に初版と書いてあるのと初刻と書いてあるのと、再版、再刻と書いてあるのとありますし、又出版所の上に江戸と大阪と京都と並立してあることに付て、イロ／＼面白い事柄や材料があるのです。又節用集の部

分けを十門、十二門、十三門。果ては二十門以上になつてゐるのがあります。が大體からいふと十三門が普通の例であります。以上申上しました事については種々の事項がありますけれども餘り長くなりますしもう時間もありませんから凡て略します。丁度二十分経ちましたから之で話を惜みます。甚だ取り止めのない杜撰なお話をしました。

緒 言

足利の世に初めて現はれ、徳川時代に至りて盛んに刊行せられ、延いて明治維新以後まで廣く世に行はれし我國語通俗辭書の一たる節用集は、辭書史に於けるは固より、教育史、文化史上より見るも、看過すべきものにはあらず。殊に國語學研究資料としては極めて貴重なるものなり。已に去る大正十年五月下旬、吾京都の地に於て、故和田維四郎氏追悼記念辭書類展覽會を行はれし折、徳川以前の古本節用集をも陳列せられ、大に世の注意を惹きたりき。爾來年を閱する茲に十有五年、未、斯種の催あるを聞かず。今次、本學秋季展覽會開催に際し、教授龜田次郎氏が蒐集せる國語辭書中より、特に徳川時代刊行の節用集を選擇借用し、添ふるに二三公私の圖書館、文庫所藏本を以てし、茲に之を展覧に供する事とせり。尙明治維新以後のものに至りては、他日改めて同人間に企劃する所あらんとす。斯舉學術研究に、毫末の貢獻寄與する所あらば幸なり。右聊か其來由を述べて緒言とす。

昭和十年十月二十日

凡

例

一、本書目に收載せるものは、特に其初刊本、若くはそれに近き古板本を選出して、年代順に配列し、其補刻、重板、若くは他人の求板は、凡てこれを除きて各條下に註記す。但、其改題を行ひ、増補訂正を施せるは、一々之を收載せり。

一、書名同一にして其著者を異にせる、又其内容に差異あるは、皆これを別個に掲載せり。

一、元來、通俗辭書の常として平素其使用頻繁なりしを以て、今日世に存するもの汚損甚しく、爲に其題簽、見返、又は奥付等の破毀せられたるもの尠からず、從ひて其外題、又は刊行年月の不明となれるもの夥しきを見る。此等は其内題又は内容、若くは他の所藏本について調査を遂げて記載し、出來得る限り其精確を期したり。然れども尙、間々未詳に終れるものあり。此等は其本文内容の記事に依りて大體の年代を推定して之を記載し置けり。

一、俳諧、戯曲、小説、洋學、武伎、雜藝其他の特種節用集の類は、其二三を除く外は凡てこれを省き、本書目には普通一般のもののみこれを掲載せり。

一、徳川時代三百年間、節用集の刊行本は極めて夥しく、遺漏脱落尙多かるべし。其等は今後漸次其獲得を俟ちて之を補成し、其完璧を期せんとす。然れども其主要著名のものは、殆んどこれを網羅せりと信ず。

一、節用集組織體裁の根原に、三種の系統あり。今其各代表的のもの三部を陳列して參考に供へたり。

龜田次郎氏所藏

德川時代
刊行

節用集展觀書目錄

○

一 節用集	元和五年十二月刊	上(欠)下、零本	横一冊
二 二體節用集	寛永三年六月刊	上中(欠)下、零本	横一冊
三 二體節用集	寛永六年九月刊		横三冊
四 節用集	寛永七年孟夏刊		大二冊
五 二體節用集	寛永九年孟夏刊		大二冊
六 二體節用集	寛永十四年刊	上中(欠)下、零本	横一冊
七 二體節用集	無刊記本(此頃ノモノ)	上中(欠)下、零本	横一冊
八 真草二行節用集	寛永十五年(戊寅)霜月刊		大三冊
九 真草二行節用集	寛永十六年(己卯)仲秋刊		大合一冊
一〇 二體節用集	寛永二十一年九月刊	上中(欠)下、零本	横一冊
一一 真草二行節用集	正保三年(丙戌)仲秋刊	上(欠)	大二冊

三 真草二行節用集

正保三年仲冬刊

大三冊

四 真草二行節用集

慶安三年孟冬刊

大合一冊

五 真草二體節用集

慶安四年孟秋刊

大三冊

六 真草二行節用集

慶安四年孟冬刊

大三冊

七 真草二行節用集

萬治元年霜月刊

大合一冊

八 真草二行節用集

萬治二年刊

大合一冊

九 真草二行節用集

寬文元年九月刊

大合一冊

一〇 增補二體節用集

寬文三年仲春刊

橫一冊

一一 真草二行節用集

寬文四年六月刊

大合一冊

一二 新板 二行節用集

寬文五年五月刊

大合一冊

一三 真草增補大節用集

寬文五年六月刊

大七冊

(真草二行節用集)

初板ハ寛文二年刊ニ
テ其別板也

一四 頭書增補二行節用集

寬文十年正月刊

大三冊

一五 二行節用集

寬文十年五月刊

大合一冊

一六 二行節用集

延寶二年孟春刊(松會板)

大一冊

初板ハ寛文十年正月
刊但前者トハ別種
也

吳 二行節用集

延寶二年陽月(十月)刊

大合一冊

寛文十年正月板ノ頭
註ヲ省キタルモノ

毛 翰墨節用

延寶三年初夏刊

小一冊

大 增補大節用集

延寶四年孟春刊

上中(欠)下、零本

小一冊

寛文二年本及同五年
本(大本)ノ異板也

元 頭書增補二行節用集

延寶七年孟春刊

大一冊

貞享元年ノ後刷本アリ
一六七參照

三 頭書增補二行節用集

延寶八年仲夏刊

大一冊

三 新
綴合類節用集
(字林拾葉)

延寶八年仲秋刊

中十冊

三 新刊節用集大全

延寶八年霜月刊

大七冊

三 增補頭書兩點二行節用集

延寶九年五月刊

大一冊

高 頭書合類節用集

貞享二年八月刊

大一冊

(頭書
增補合類節用集大全)

三 廣益二行節用集

貞享三年孟春刊

中合二冊

三 頭書
增補節用集大全

貞享四年正月刊

大合一冊

三 釐頭節用集大全

貞享五年七月刊

大二冊

三 大益節用集綱目

元祿三年初夏刊

中合一冊

元 頭書大廣益節用集

元祿四年陽春刊

大一冊

四 頭書增補節用集大全

元祿五年春刊

大一冊

元祿二年刊モアリ

四 世話字節用集

元祿五年七月 上中(欠)下、零本

中一冊

四 大海節用和國寶藏

元祿六年季春刊

大一冊

四 頭書增補節用集大全

元祿六年刊

大一冊

四 頭書大廣益節用集
(繪抄)

元祿六年(?)刊

大一冊

(大廣益和玉節用集)

四 頭書增補節用集大全

元祿七年刊

大一冊

四 頭書增字節用集大成

元祿十年仲秋刊

大一冊

四 頭書增補節用集大全

元祿十一年正月刊

大一冊

(大成節用集)

四 增和漢合類大節用集

元祿十一年咸、享保二年正月刊、明和三年再板

中十三冊

萬延、文久板モアリ

(和漢音釋書言字考)

四 頭書增補大成節用集

元祿十二年正月刊

大一冊

五 萬寶節用集

元祿十五年刊

大一冊

五 増益節用集大全

元祿末頃刊

大合一冊

(頭書增補節用集大全)

五 江戸大節用海内藏

寶永元年刊、天保四年増補、文久三年補刻

大二冊

五 萬世節用集廣益大成

寶永初年刊

大一冊

四 大廣益字盡重寶記綱目
扁引重寶字考選

寶永二年二月刊、寬延二年
孟春刊、享保八年正月刊、
安永三年初秋刊

合本、天明元年刊

橫一冊

五 大嘉節用無量寶藏

寶永五年刊

大一冊

五 大船節用字林大成

寶永六年頃刊

大一冊

五 立新節用和國寶藏

寶永七年刊

大一冊

五 大魁節用悉皆不求人

寶永年間刊

大一冊

五 萬金節用永代通鑑

正德四年刊

大一冊

六 字福節用大黒袋

正德四年刊

大一冊

六 萬々節用福德寶藏

正德四年刊

大一冊

六 和光節用集百壽丸

正德五年刊

大一冊

六 四民童子字盡安見

正德六年正月刊

中一冊

六 大廣益節用不求人大成

正德年間刊

大一冊

六 男節用集如意寶珠大成

享保元年八月刊

大一冊

六 大萬國節用福字通便

享保元年刊

大一冊

元文元年十一月求板
本、明和六年九月改
正本アリ

至 滿字節用書翰寶藏

享保元年刊

大一冊

同十五年板本モアリ

亥 大益字林節用不求人大成

享保二年孟春刊

中一冊

充 増益
大字 大國花節用集珍開藏

享保二年四月刊

大一冊

己 悉皆世話字彙黑寶

享保十八年孟春刊

大一冊

壬 大富節用福壽海

享保十八年五月刊

大一冊

壬 字學口荒

享保十九年刊

大一冊

上製本、下(欠)

壬 新增節用無量藏

享保二十年刊

大一冊

丙 森羅萬象要字海

元文五年七月刊

大一冊

安永二癸巳年晩春吉
旦板アリ

(柱ニ増綴節用不求人トアリ)

丑 大萬寶節用集字海大成

元文五年中秋刊

大一冊

寅 女節用集翟衆囊家寶大成

寛保三年九月刊

大一冊

卯 文海節用千金囊

寛延二年初春刊

大一冊

辰 袖寶節用集

寛延三年立春刊

小一冊

未 懷寶節用集綱目大全

寛延三年孟春刊

横一冊

文化九年季冬再刊本
アリ

己 永代節用大全無盡藏

寛延三年正月刊
寶曆二年改正

大一冊

公 永代節用無盡藏

寛延三年刊、天保二年再刻、嘉永二年三刻、文久四年改正増補四刻

大三冊

公 和漢節用無雙囊

寶曆二年三月刊

大一冊

天明四年本、寛政十一年本アリ

公 増加節用集

寶曆二年五月再刻、寛政三年二月校正、文政七年三月求板

横一冊

公 増廣字便倭節用悉改囊

寶曆四年刊

大一冊

安永板、文政元年九月板アリ

公 増大節用文字寶鑑

寶曆六年孟秋刊

横一冊

元祿板アリコレが初刊カ

公 和漢節用萬寶圖會

寶曆六年十一月刊

大一冊

五三ノ後刷カ

(内題改正増字 萬世節用集廣益大成)

公 早引節用集

寶曆七年正月再刊

小二冊

再板トアレバコレ以前ノ作ナリ年代未詳

公 大大節用集萬字海

寶曆七年孟春刊、明和五年再刊

大一冊

公 新撰正字通

寶曆七年秋成、寛政二年正月刊、文政五年補刻

横一冊

公 寶曆節用字海藏

寶曆七年頃刊

大一冊

八七ノ後刷カ

公 袖中節用集

寶曆八年十月刊

横一冊

公 増字百篇早引節用集

寶曆十年三月初刊、安永九年四月刊

横一冊

天明以後、明治八年迄諸板アリ

公 書札節用要字海

寶曆十一年刊

横一冊

公 萬字彙節用悉皆藏

寶曆十三年十一月刊

大一冊

壹 增補 早引節用集

明和五年孟夏刊

小一冊

寛政、文化、文政、
天保、弘化、文久ノ
諸板アリ

貳 百萬節用寶來藏

明和六年五月刊

大一冊

参 男節用集如意寶珠大成

明和六年九月改正

大一冊

六五ノ改正本ナリ

肆 新撰 文翰節用通寶藏

明和七年孟冬刊

大一冊

伍 滿字節用錦字選

明和八年四月刊

大一冊

一〇〇 大新增節用無量藏

安永二年正月刊

大一冊

一〇一 字引節用集

安永二年正月刊

小一冊

一〇二 日川重寶 字盡大成 增補童子節用集

安永五年二月刊

小一冊

一〇三 節用集

安永七年成、天明六年再刻

横一冊

一〇四 明海節用大成

安永新刊

大一冊

一〇五 萬代節用字林寶藏

天明二年原刊三年トセルアリ
寛政七年補刻

大一冊

文久二壬戌補輯本アリ

一〇六 大成正字通

天明二年刊

横合一冊

一〇七 合類節用集無盡海

天明三年九月刊

大一冊

三七ノ改題本ナリ

一〇八 眞草 日本節用集萬歲藏
兩點

天明五年九月刊

小一冊

文化八年二月再刻、
天保八年初卷三刊アリ

一〇九 廣益字典節用集

天明六年五月刊

横一冊

寛政三年六月刊、天
保九戊戌年再刻アリ

二〇 大全早引節用集

天明八年春原刊

横一冊

天明以後、明治五年迄十三刻セリ

二一 萬寶節用富貴藏

天明八年刊、享和二年再刊

大一冊

文化八年再刻本アリ

二二 改正蠶海節用集

寛政五年三月刊、文久三年三月再板

横一冊

二三 掌中節用急字引

寛政六年正月刊

小一冊

文政五年三月補刻本アリ

二四 玉簡字貫節用集

寛政八年刊

横一冊

文化三年十二月増補再刻本アリ

二五 萬方繪引節用集

寛政八年十一月刊

小一冊

文政七年春刊ノ後刷本アリ

二六 大豐節用壽福海

寛政十一年正月再刊

大一冊

二七 俗書正譌

寛政十二年正月刊

中一冊

二八 新撰都會節用百家通

寛政十三年正月刊、文化八年七月補成

大一冊

文政二年八月再刊、天保六年十二月三刊アリ

二九 節用早引大全

享和二年刊

横五冊

一〇六ノ後刷本ナリ

三〇 偶奇假名引節用集

享和二年御覧、文化元年刊

横一冊

文政三年ノ補刻本アリ

三一 萬家日用字引大全

文化三年八月刊

横一冊

三二 玉簡字貫節用集

文化三年十二月増補再刻

横一冊

一一四ノ増補本ナリ

三三 懷手引節用集大全

文化五年成、刊

横一冊

三四 早引說要集

文化六年七月刊

小一冊

三六 早引節用

文化年間刊(十年前後)

横一冊

嘉永年間刊、行ノ異板
増補本アリ、一六八
参照

三六 増補早引節用集
改正

文化十二年三月刊

小一冊

文政、天保、弘化、
文久ノ諸板アリ

三七 常用俗字手控

無刊記本(文化十三年八月ノ書入アリ此頃ノモノカ)横一冊

三八 いろは節用集大成

文化十三年季秋刊

横一冊

三九 字寶節用千金藏

文化十五年三月刊

小一冊

天保十三年正月刊、
安政五年十一月再刊、
本アリ、一四三ノ原
刊本ナリ

四〇 字寶節用無雙大成

文化十五年三月刊、安政四年二月求板

小一冊

三本
同板ナリ

四一 日本節用無雙大成

文化十五年三月刊、安政四年二月求板

中一冊

四二 文會節用集大成

文政二年孟秋補刻

大一冊

四三 見出繪引節用大全

文政七年春刊

小一冊

一一五ノ改題本ナリ

四四 増廣字便倭節用集悉改大全

文政九年三月刊

大一冊

八四ノ改刷カ

四五 増補訂正掌中要字選

文政十年六月刊、天保十二年正月補刻

折本一鋪

四六 文寶節用集

文政十二年仲冬刊

横一冊

天保十一年晚秋再刊
本アリ

四七 増補大寶節用文林藏

文政十三年十二月刊

小一冊

四八 文政増補廣益好文節用集

文政年間刊

小一冊

三完 增字 百倍懷寶節用集

天保七年九月刊

横一冊

一四〇 新増 四聲節用大全

天保年間刊(十年頃カ)

横一冊

一四一 字盡節用繪抄大全

天保十二年孟春刊、嘉永二年補刻

小一冊

(文章字盡節用解)

一四二 書狀文字自在引

天保十三年正月刊

横一冊

一四三 十三門部分 音訓正誤 大全早字引

天保十三年五月刊

横一冊

(一名以呂波節用集)

一四四 増補早引二體節用集

天保十三年刊

横一冊

一四五 意見早引太善節用

天保十四年五月刊

小一冊

一四六 天保新刻 早字引節用集

天保十四年五月刊

小一冊

一四七 訂正早字引

天保十四年五月刊

横一冊

(一名假名引節用集)

一四八 大全早字引節用集

天保十四年五月刊、嘉永七年晚秋求板
安政六年初夏再刻、明治三年初夏再板

横一冊

一四九 早引永代節用集(山崎美成著)

天保十四年刊、嘉永三年再刻

横一冊

一五〇 懷寶早引節用集

天保十四年刊

横一冊

一五一 懷寶數引節用集

天保十五年七月刊

横一冊

一五二 懷玉節用集

天保十五年刊

横一冊

一三八ノ後刷改題本ナリ

文久三年再刻本アリ

一五 增字 真俗早引節用集

天保末年刊

横一册

一四 增字 百倍早引節用集

弘化元年七月刊

横一册

一五 增補改正 伊呂波音訓 敷引節用集

弘化三年刊

横一册

一六 大成無雙節用集

嘉永二年三月刊

小一册

一七 增字 百倍早引節用集(山城美成著)

嘉永二年秋刊

横一册

一八 萬代早引節用集

嘉永三年刊

横一册

一九 大全早引節用集

弘化四年御免、嘉永四年刊

横一册

二〇 早引增字節用集

嘉永六年初秋刊

横一册

(早引萬代節用集)

二一 字會節用永代藏

安政三年刊

大一册

二二 大福節用無盡藏

萬延二年刊

大一册

二三 早引萬壽節用集

文久元年初冬刊

横一册

二四 萬世早引增字節用集

文久三年刊

横一册

二五 魁本大字類苑

慶應二年成、明治二十二年四月刊

洋大一册

○追

加

二六 節用集

寛永十二年六月刊

大三冊

京都府立圖書館所藏

二七 頭書大節用

貞享元年三月刊

大合一冊

二九ノ後刷也、
大谷大學圖書館所藏

(頭書増補二行節用集)

二八 早引節用

嘉永年間刊

續一冊

一二五ノ異版増補本
也 泉宗順氏所藏

○参

考

節用集には、其本文イ部天地門(又は乾坤門)に收載せる最初の語彙に依て、伊勢、印度、乾の三種に別かたる。今此三種の代表のもの三部を陳列して參考に資す。

一 節用集

明應五年五月三日成

寫本、大二冊

龜田次郎氏所藏

伊勢本現存最古のものにして、又節用集成功年月の明白なる最古のものなり。

二 節用集

弘治二年成

寫本、大一冊

伊藤祐昭氏所藏

印度本現存最古のものなり。

三 節用集

慶長二年刊

刊本、大二冊

大谷大學圖書館所藏

乾本現存最古のものにして、而も刊行せられたるものなり。世に易林本と唱へらる。徳川時代の節用集は、殆んど其全部この系統に屬す。